
読書会レジュメ

な

2018年7月21日

● ● ●

1. ジョン・R・サール『隠喩』

(1) 問題の定式化

：問題

本稿の目的は、隠喩の機構の解明にある。「SはPである」と言うことで「SはRである」を伝えることはいかにして可能になっているのだろうか。言い換えると、いかにして「SはPである」と聞くことで「SはRである」を導出するのだろうか。

：本義的発話

隠喩的発話の機構解明の前に、本義的発話の特徴を明らかにしておこう。

①本義的発話とは、「発話の意味」¹⁾と「本義的な文の意味」とが等しい発話のことである。

②文の本義的意味は、背景的前提と相関する一群の真理条件を決定する²⁾だけである（「本義的意味は、背景的前提と相関するしかたで、真理条件を決定する」という意味か？）。

③類似性の概念が本質的役割を果たしている。

(2) 隠喩に関する一般的な誤謬のいくつか

：比較説

比較説とは、対象間の比較が隠喩的発話には内包されているという説である。後に出てくる直喩説とほぼ同じものである。「サリーは竜である」を「サリーは竜に似ている」と解する。

サールは比較説を以下の観点から批判する。

①比較説によると、「サリーは竜である」は「サリー」と「竜」という二つの対象を比較する文ということになる。するとこの文は「 $(\exists x)(x \text{ is a dragon})$ （竜が存在する）」を含意することになる。しかしこれは直観に反する。

②「リチャードはゴリラだ」は、ゴリラに関するわれわれの事実認識が変化したとしても依然として真でありうる。よって、この文はあくまでもリチャードに関する文であって、ゴリラについて何かを主張している文ではないはずだ。

1) 本文では「話者の表意 (speaker meaning)」とも書かれる。

2) 真理条件的意味論によれば、文の意味を知っているとは、文の真理条件を知っていることである。たとえば、「雪が白い」の意味を知っているとは、どういう状態が成り立っていれば「雪が白い」と言えるのかを知っていることである。「雪が白い」が真である \iff 雪が白い。

： 意味論的相互作用説

相互作用説とは、隠喩的に使われている語と字義通りに使われている語との相互作用によって隠喩が生まれるとする説である。

サールは相互作用説を以下の観点から批判する。

①隠喩的発話につねに字義通りの語が含まれているとするのは事実誤認であろう。「四辺性が遅延を飲む」はどの語も隠喩的であり、字義通りの語は含まれていない。

②「相互作用によって隠喩が生まれる」と言うときの「相互作用」を字義通りに理解すると困難が生じる。「サリー」「ジョーンズ嬢」「あそこに座っている女の子」という三つの表現はどれも同じ人物を指すものとする、「サリーは氷の塊だ」「ジョーンズ嬢は氷の塊だ」「あそこに座っている女の子は氷の塊だ」はどれも同じ隠喩を意味しうる。しかし相互作用説によれば、あくまで語と語の相互作用だと言っているはずだから、異なる表現には異なる隠喩が対応しなければならないことになり、上の事例と整合しない。すると「相互作用」を隠喩的な意味だと解する道を取るようになるが、それでは隠喩を隠喩で説明してしまうことになる。

： 本義的発話との差別化の必要

比較説は「類似性にもとづいて意味が定まる」と言い、相互作用説は「コンテキストとの相互作用によって意味が定まる」と言う。しかし「類似性が重要だ」「意味はコンテキストに依存する」という特徴は本義的発話の場合も同じであろう。隠喩の理論は、隠喩的発話と本義的発話の違いを適切に説明できなければならない。

(3) 比較説のさらなる検討

： アリストテレスの直喩説

直喩説とは、直喩における「似ている (like)」「のような (as)」といった語を省略してできたのが隠喩的発話であるとする説である。

サールは直喩説を以下の観点から批判する。

①隠喩を説明しうる本義的な類似性が見当たらないと思われる隠喩の例は多くある。「サリーは氷の塊だ」など。

②類似性について適当な述語が存在する場合でも、隠喩的発話と類似性に関する発話とは一般に同一の意味でない。「人間は狼である」は「人間は凶暴である」ということを意味しているのであって、「人間と狼とは凶暴だという点が似ている」を意味しているのではない。

③直喩説もまったく的外れというわけではない。隠喩の意味理論ではなく解釈理論、つまり隠喩を理解するための類似性を用いた戦術と考える（「人間は狼である」から「人間は凶暴である」を導出するための戦術として、人間と狼との類似性が用いられる）。

④しかし直喩説を解釈理論と考えたとしてもなお直喩説には不十分な点がある。いかなる類似性も話者が念頭に置いていたかをいかにわれわれは知るか、このメカニズムが不明なままであるという点である。類似性は「何について」似ているのかを抜きにしては無内容である。

： ジョージ・ミラーによる直喩説の定式化

ミラーは直喩説を洗練させた。ミラーの定式化では、隠喩は以下のように分析される。

• S は P である $\iff (\exists F)(\exists G)(SIM(F(S), G(P)))$

(S が F であることと、 G が P であることとの間に類似性があるような、ある性質 F と G とが存在する)

• x は F である (x が F する) $\iff (\exists F)(\exists y)(SIM(G(x), F(y)))$

(x が G することと、 y が F することとの間に類似性があるような、ある性質 F と個体 y とが存在する)

しかし類似性は「何について」の類似性かを明示しなければ意味がない。そこでサールに従ってミラーの分析を再定式化すると以下ようになる。

• S は P である $\iff (\exists F)(\exists G)(\exists H)(SIM_H(F(S), G(P)))$

• x は F である (x が F する) $\iff (\exists F)(\exists y)(\exists H)(SIM_H(G(x), F(y)))$

各変項の値をどう算出すればよいのかミラーは何も述べていない（値の算出は「解釈」の問題であり、「再構成」の問題とは別だとミラーは考えている³⁾）。

サールによれば、ミラーの理論は(a)直観に反し、(b)動機に欠け、(c)話者・聞き手の計算コストが高くつく（話者・聞き手はやたらと複雑な思考を経て隠喩を表現し解釈していることになってしまう）。

サール曰く、「人間は狼である」を素直に直喩説で解釈すると「人間と狼が似ている」ということなのだから、「ある性質 F と G とが存在し、人間が F であることと狼が G であることとが似ている」と分析するのは直観に反する⁴⁾。

(4) 隠喩解釈の諸原理

： 隠喩的発話の成立条件

話者・聞き手が、本義的発話によるコミュニケーションを成立させられる知識をもつと仮定しよう。この条件だけでは隠喩的発話はできない。さらに以下の条件が加わって初めて隠喩的発話が可能となる。

- ① 発話の意図が本義的でないと聞き手が気づくための戦術の共有。
- ② P から R の取りうる値を算出するための戦術の共有。
- ③ S に関する知識にもとづき、 R の値を確定するための戦術の共有。

： ②の段階における諸原理（戦術）

原理 1 P である事物が定義によって R であること。

原理 2 P である事物が偶然的に R であること。

原理 3 P である事物は R ではない、ということを話者と聞き手が知っていても、 P であるものが R であると言われたり信じられたりしていること。

原理 4 P であるものが R であるわけではなく、事物 R に似ているわけでもない。 R であると信じられているわけでもない。それにもかかわらず、 P という発話が属性 R を連想させること。

.....
3) しかしそのような議論上の切り分けは可能なのだろうか。

4) しかしこの批判は的を射ているだろうか。論理式を見る限り、 F と G が同じ性質であってもよいはずだから、「人間が凶暴であることと狼が凶暴であることが、ある観点において似ている」のように解釈されうるのではないか (?)。

原理 5 事物 P は事物 R と似てもいないし、似ていると信じられているわけでもないが、それにもかかわらず P であるという状況が R であるという状況と似ている⁵⁾、ということ。

原理 6 P と R とが意味においては同一ないしは類似しているが、一方（通常は P）が適用に限定があつて字義通りには S において適用できないような事例があること。

原理 7 原理 1～原理 6 を、「S は P である」という形式以外の形式にも適用するための方法。

原理 8 換喩・提喩を隠喩の一種として取り扱おうという原理。

： 比較説と相互作用説

比較説は②の段階における解答の試み、相互作用説は③の段階における解答の試みと考えられる。

(5) 隠喩、反語法、間接的言語行為

： 隠喩とその他の語法との比較

隠喩と反語法その他との仕組みは異なる。しかし、いずれであれ、その原理を得るためには、会話の諸原理と言語行為遂行に関する一般的諸規則があれば十分である。

： すべての隠喩は本義的表現へとパラフレーズできるか

どんな隠喩も本義的表現へとパラフレーズできるだろうか。

ある意味では、答えは「Yes」である。このことは「表現可能の原理」からの帰結である。「話し手が言いたいこと、つまり、話し手の発話意味は、話し手自身にはわかっている。そして、わかっていることは、字義的意味を持つ語や文を用いて表現可能である、とサールは考えています」⁶⁾。

ある意味では、答えは「No」である。隠喩は真理条件を伝えること以上のことをおこなう発話であり、この部分を本義的発話で再現することはできない。

2. サミュエル・R・レヴィン『隠喩の標準的読解法と文学的隠喩』

(1) 導入

サール説で評価できる点は、「文の意味」と「発話の意味」との区別を立てた点である。批判されるべき点は、対立理論に対し、藁人形論法を用いてしまっている点である。

(2) 比較説と相互作用説

： 比較説

比較説は、「実在の対象を比較する」とまでは言っていない。「竜」なら「竜」という語に結び付けられた性質を話者と聞き手は知っていればよい。

： 相互作用説

たしかにサールの言うように、一つの隠喩的な文のなかに本義的な語がまったく現れない場合はある。しかし文章全体、文脈全体を見れば必ず隠喩表現の周りには本義的に使用されている語が存在す

.....
5) 「何について」似ているのかをどうやって算出するというのか。

6) 富田恭彦『科学哲学者 柏木達彦の春麗ら【心の哲学、言語哲学、そして、生きるということ、の巻】』ナカニシヤ出版、2000年、102頁。

るはずである。

一つの指示対象が複数の固有名をもつ事例を用いたサールの議論に対する反論。

「相互作用」という語自体が隠喩ではないかとサールは言うが、相互作用説を唱えるブラックの説明は隠喩的ではない。

：直喩説

いかなる性質について類似しているのかを教えてくれない、とするサールの批判は正しい。しかし、この批判はサール説についても同様に当てはまる。

(3) 比較の方向性と解釈のしくみ

サール説は説明力に限界がある。以下のように、「小川が微笑んだ」はさまざまに隠喩解釈できるが、このことがサール説では説明できない。

- ・小川＋人間性 $\xrightarrow{\text{融合}}$ 小川（擬人化）が微笑んだ。
- ・微笑んだ＋液体性 $\xrightarrow{\text{置換}}$ 小川がきらめいた。
- ・小川＋人間性 $\xrightarrow{\text{置換}}$ 小川っぽい人（クールな人、清潔な人など）が微笑んだ。
- ・微笑んだ＋液体性 $\xrightarrow{\text{融合}}$ 小川が、輝きと微笑の交錯した外見をしていた。

(4) 文学的隠喩のための一つの提言

隠喩はまず、字義通りに受け取られる。それは可能世界を表現している。可能世界の解釈（現象的解釈）によって、隠喩の意味が明らかとなる。

上の説明のしかたは、ふつうの会話における隠喩の説明についてはあまり説明力は増さない。しかし文学的隠喩、とくに抒情詩を念頭に置くとき、説明力を発揮する⁷⁾。

3. 日本語による隠喩の事例

- ・花子への愛が太郎を包む。愛が太郎から花子へ流れて行く（太郎は花子を愛している）⁸⁾。
- ・稀夢子は福原にコーヒーを出し、彼の向かいの低い肘掛椅子に腰をおろした。膝上5センチのスカートをはいていたので、小麦色が自慢の太腿がだいふ出た。一瞬彼女の膝に眼を吸い寄せられた福原は、非人間的な努力を試み、ばりばりと大きな音をたててその視線をひっぺがした⁹⁾。
- ・みずみずしい若葉が咲いていた（「ある朝みずみずしい若葉の出現に気づいたとき、花が咲くように新緑の葉が『咲いた』、と言いたいことがないだろうか。私たちの日常的な言語体系は、花にくらべればたかが葉っぱ……と、見くびっていたのだ」¹⁰⁾）。

7) 抒情詩はむしろ虚構として解釈したほうがすっきりするようにも思える。

8) 佐藤信夫『レトリック・記号 etc.』創知社、昭和61年、24頁。

9) 筒井康隆「君発ちて後」。

10) 佐藤信夫『レトリック・記号 etc.』創知社、昭和61年、64頁。